

看護学生の精神障がい者に対するイメージと社会的距離の変化

ー精神科経験と講義・実習の影響ー

中島充代 ・梅津郁美^{*1}

要 旨

精神障がい者への偏見や否定的なイメージは精神看護の障壁となる。本研究では、精神看護教育を受ける前に精神科病院で勤務経験のある学生とない学生の精神障がい者に対するイメージと社会的距離を、講義前・講義後・実習後に調査した。結果、精神科経験学生は未経験学生よりも「治らない」「不活発な」イメージを持ち、社会的距離も大きかったものの、必ずしも経験がイメージなどに大きな影響を与えるわけではなかった。講義や実習の影響に関しては、講義によって「こわくない」「安全な」など安心感をもたらす認知的要素の変化がもたらされ、実習の経験によって精神障がい者への多くのイメージが好意的なものへと変化した。一方、社会的距離に関しては、講義では変化しなかったが、実習を経験することによって距離が小さくなった。講義や実習、特に臨地実習は精神障がい者への学生の好意的な態度を生じさせる効果が期待されることが示唆された。

キーワード：精神障がい者のイメージ、精神看護学実習、社会的距離、看護学生

1. はじめに

精神障がいを持つ人に対する偏見やスティグマは精神科看護に大きな影響を与える。実際、講義中に精神科勤務経験のある学生が「精神障がいのある人は危険。」と感想で述べた。星越(2005)¹⁾は、精神障がい者に対する社会的態度は精神疾患の知識や精神障害者との接触体験が豊富になるほど好意的、受容的な態度変容がもたらされるとはいえないことを示唆している。これでは精神科看護の質の向上を図る上で障壁となる。精神看護教育者は、精神障がいを持つ人を理解するという目標の中で、まず偏見をな

くすことを心がけている。田中(1977)²⁾は「偏見と呼ばれる態度においては、感情、認知、行動傾向が密接にからみあっている。」と述べている。

先行研究では、偏見に関連する要因として精神障がい者へのイメージと社会的距離が測定されている。イメージは形容詞の対を用いたSD法が用いられ、感情的側面と認知的側面を測定できる^{1) 3) 4) 5)}。社会的距離尺度は田中(1977)²⁾によれば、態度の行動的成分、すなわち人種に対する行動的意図を測定するものであるという。大島⁶⁾、三田⁷⁾らの研究ではステレオタイプの

1. 福岡県立精神医療センター太宰府病院

な「危険」などのネガティブなイメージを持つ人ほど社会的距離も大きいことなどが明らかになっている。距離が大きければ、例えば友好的行動をとりたくないことが示され、患者との隔たりが大きく、彼らを理解しケアをする上で影響を及ぼすと考えられる。

看護教育課程において、精神科勤務経験のある学生とない学生が混在して障がいに対する偏見やイメージが異なる場合には、講義や実習の内容や方法についても検討が必要である。そのため、本研究では精神障がい者へのイメージと社会的距離に学生の精神科経験が与える影響と、それらの講義前後と実習後における変化を調査することを目的とする。

2. 方法

2-1 講義と実習内容

2-1-1 講義内容

1 学年目、2006 年 10、11 月に 90 分の講義を 5 回実施した。その内容は①精神看護概論、②精神保健福祉法に基づく人権と看護、③④各症状に対する看護援助、⑤リスクマネジメントと精神科リハビリテーションと看護であった。

2-1-2 実習内容

2007 年、6～11 月に 2 週間の臨地実習が実施された。学生一人が一人の患者を受け持った。1 週目にアセスメントを行いながら援助計画を立案し、日々の行動計画記録で援助の振り返りを行った。指導者は援助を一緒にやりながら、日々の記録やカンファレンスを実施する中で指導した。2 週目に受け持ち患者とのプロセスレコー

ドを検討した。実習最終日には合同反省会を実施した。

2-2 調査尺度と分析方法

2-2-1 イメージの変化の調査

星越¹⁾と石毛、林³⁾等が用いた形容詞を参考に 20 組の形容詞対を用いて 7 段階（1～7 点）に得点化した SD 法による『精神障がい者イメージ調査質問項目』を作成した（表 1 参照）。

2-2-2 社会的距離の調査

牧田⁴⁾が作成した統合失調症に対する社会的距離尺度（SDSJ）を用いた。①「統合失調症で入院していたことのある人とは付き合わないのが一番である。」、②「統合失調症を患ったことのある人の近所で暮らすことになったら、それは私にとって苦になるだろう。」、③「私は統合失調症を患ったことのある人が運転するタクシーには乗りたくない。」、④「統合失調症を患ったことのある教師は、学校で教えることを許可されるべきではない。」、⑤「もし、統合失調症を患ったことのある男性と自分の娘が結婚したいと言ったならば、娘がどうであれ私は結婚には反対するだろう。」という 5 つの質問項目に対し「そう思う」から「そう思わない」の 4 段階で当てはまるところを 0～3 点とし、合計（0～15 点）を得点とした。得点が高いほど社会的距離が大きいと判断する。

2-3 調査時期と分析方法

調査は①講義前（初回講義前）、②講義後（5 回目講義終了後）、③実習後（合同反省会終了後）の 3 時期に実施した。分析に関して、2（経験有・無）×3（講義前・講義後・実習後）の 2

要因の分散分析を行った。有意差がみられた場合、Bonferroni の方法で多重比較を行った。いずれの検定においても有意水準は $p<0.05$ に設定した。

2-4 調査対象者

70 名（16～44 歳；平均 23.4 歳）を対象とし同意が得られたのは 67 名（経験学生 12 名；平均経験年数 2.1 年 $\pm$ 2.0 年、未経験学生 55 名）だった。精神科経験は看護助手として精神科病院に勤務した経験とし、その期間は問わなかった。（以下、精神科経験を「経験学生」、他を「未経験学生」と略す）

2-5 倫理的配慮

調査時は病院の倫理委員会がなく、実習指導者会、看護部、対象看護学校教務主任に対し計画書を提出し、調査と公表の許可を得た。看護学生に対しては講義前に調査の協力を説明した。調査して統計処理には生年月日を用いるが、無記名で個人が特定できないこと、途中で参加をやめられること、拒否しても授業に不利益にならないこと、講義及び実習の成績評価とは関係のないことを文書にて説明し、同時に結果を公表することに関しても文書にて同意を得た。調査時はのり付き封筒を用いてプライバシーの保護につとめた。調査終了後は、学生および教務主任、看護部と実習指導者に結果を報告した。

3. 結果

3-1 対象者

同意が得られた 67 名中、実習修了者は 56 名だった。分析の対象となったのは、3 時期すべ

てに有効回答を示した 33 名であった（経験学生 10 名；平均経験年数 2.4 $\pm$ 2.2 年、未経験学生 23 名）。

3-2 精神障がいを持つ人に対するイメージ

2 要因の分散分析の結果は表 1 に示す通りだった。「暗いー明るい」、「迷惑なー迷惑でない」において交互作用が認められた。下位検定の結果、未経験学生のみが実習後に明るく ($F=10.7$, $p<0.001$)、迷惑でない ($F=19.7$, $p<0.001$) というイメージへと変化した。

経験の有無の主効果がみられたのは、「治らないー治る」と「不活発ー活発」だった。経験学生の方が未経験学生よりも不活発で、治らないイメージを抱いていた。

時期については「不活発なー活発な」、「遠いー近い」、「遅いー早い」、「弱いー強い」、「深いー浅い」以外において主効果がみられた。下位検定の結果、講義前と後で有意差があったのは、「こわいーこわくない」、「危険なー安全な」だった。講義後は講義前よりもこわくない、安全なイメージに変化した。これら 2 つのイメージは、実習後にさらにポジティブな方向へと変化した。また、実習後は、講義後と比較して、治る、きれいな、穏やかな、良い、やわらかい、あたたかい、単純な、軽い、明瞭なイメージへ変化した。「陰気なー陽気な」と「難しいー簡単な」については、講義前と比較して、実習後に「陽気な」「簡単な」イメージへと変化が認められた。

3-3 社会的距離

2 要因の分散分析の結果は表 1 に示す通りで

あった。経験の有無において主効果が認められ、経験学生の方が未経験学生より得点が高く、精神障がい者に対する社会的距離を遠くに感じていた。また、時期においても主効果が認められ、下位検定の結果、講義前後では差がなく、講義前－実習後、講義後－実習後に有意差があった。講義前後と比較して、実習後に学生の精神障がい者に対する社会的距離は近くなった。

4. 考察

4-1 精神科経験が及ぼす影響

今回の調査において、看護教育を受ける前の精神科の経験が精神障がい者への「不活発な」、「治らない」というイメージと社会的距離にの

み影響を与えていることがわかった。「活発な－不活発な」の形容詞対は、石毛³⁾の形容詞の因子構造においては「精神病に対する否定的な感情を示す因子」に属していた。「治る－治らない」の形容詞対は先行研究では用いられていなかったものの、星越¹⁾が看護学生1年生と3年生の比較研究で明らかにした3年生の方が「治らない」と答えたことより追加したものだった。もし調査した精神科経験学生が勤務病院で自閉的な慢性期の統合失調症の患者と接していれば、活発でなく、治らないイメージを持ったことが推察できる。また、牧田⁴⁾は「看護師は統合失調症が受け入れにくい重篤な疾患であることを認識していることやステレオタイプで捉えてい

表1:精神科経験別にみたイメージと社会的距離の変化

	経験学生			未経験学生			経験別 F値	時期(①講義前・②講義後・③実習後) F値	経験×時期		
	講義前	講義後	実習後	講義前	講義後	実習後			①－②	①－③	②－③
「治らない」から「治る」へ	3.3(1.8)	2.8(1.2)	4.4(0.7)	3.9(1.6)	4.4(1.0)	5.0(1.3)	8.0**	8.4**	0.0	1.1*	1.1***
「不活発な」から「活発な」へ	3.8(0.6)	3.2(0.9)	3.7(0.8)	4.4(1.4)	4.2(0.9)	4.8(1.1)	9.1**	2.7			
「危険な」から「安全な」へ	2.9(1.2)	3.1(1.0)	4.0(1.1)	2.6(1.0)	3.4(0.9)	4.1(1.2)	0.0	20.1***	0.5*	1.3***	0.8**
「こわい」から「こわくない」へ	3.4(1.0)	3.7(1.3)	4.6(1.5)	2.7(1.4)	3.7(1.0)	5.3(1.5)	0.0	18.1***	0.6*	1.9***	1.2**
「悪い」から「良い」へ	3.4(1.1)	3.7(1.0)	4.3(0.7)	3.8(1.1)	3.8(0.7)	5.1(1.2)	2.6	14.4***	0.2	1.1**	1.0***
「激しい」から「穏やかな」へ	3.4(1.1)	3.3(1.3)	4.2(1.4)	2.7(1.1)	3.6(1.2)	4.3(1.0)	0.1	13.2***	0.4	1.2***	0.8**
「冷たい」から「あたたかい」へ	4.3(1.2)	3.9(1.0)	4.8(0.8)	4.3(1.0)	4.1(0.7)	5.2(1.4)	0.5	12.6***	0.3	0.8*	1.0***
「かたい」から「やわらかい」へ	3.8(0.6)	3.3(0.8)	4.8(1.0)	3.9(1.0)	3.8(1.0)	4.7(1.2)	0.7	11.4***	0.3	0.9**	1.1**
「複雑な」から「単純な」へ	2.9(1.4)	3.1(1.0)	3.9(1.1)	2.4(1.1)	2.7(1.1)	3.4(1.4)	1.4	9.7***	0.2	1.0**	0.8*
「陰気な」から「陽気な」へ	3.6(0.8)	3.9(1.1)	4.3(0.8)	3.6(1.2)	4.0(0.9)	4.8(1.0)	0.7	9.3***	0.4	1.0**	0.6
「重い」から「軽い」へ	3.0(1.2)	3.3(1.0)	3.9(0.7)	3.0(0.8)	3.0(0.9)	4.0(1.4)	0.0	8.0**	0.2	0.9**	0.8*
「不明な」から「明瞭な」へ	3.2(0.9)	3.0(1.3)	4.2(0.3)	3.3(1.5)	3.5(1.0)	4.1(1.1)	0.3	8.0**	0.0	0.9**	0.9**
「きたない」から「きれいな」へ	3.6(0.7)	3.7(0.5)	4.4(1.2)	4.0(1.0)	4.1(0.3)	4.8(1.1)	3.7	7.8**	0.1	0.8**	0.7*
「むずかしい」から「簡単な」へ	2.4(1.2)	2.7(1.1)	3.4(1.0)	2.3(1.0)	2.9(1.4)	3.2(1.3)	0.0	5.5**	0.4	0.9**	0.5
「暗い」から「明るい」へ	3.7(1.6)	3.5(0.9)	4.0(0.9)	3.39(1.0)	3.4(1.1)	4.9(1.1)	0.3	9.6***			
「迷惑な」から「迷惑でない」へ	4.4(0.7)	3.7(0.7)	4.7(1.2)	4.0(1.0)	4.7(1.1)	5.4(1.2)	3.5	6.5*			
「遅い」から「早い」へ	3.6(0.5)	3.6(0.7)	3.8(0.6)	3.7(0.7)	3.7(0.8)	4.3(0.8)	1.5	3.0			
「遠い」から「近い」へ	4.5(0.7)	4.3(0.7)	4.4(0.2)	3.7(1.5)	4.0(1.2)	4.9(1.2)	0.5	2.8			
「弱い」から「強い」へ	3.3(1.2)	3.6(1.1)	3.4(1.1)	3.4(1.4)	3.7(1.0)	3.5(0.9)	0.1	0.8			
「深い」から「浅い」へ	3.1(1.3)	3.5(1.2)	2.9(1.2)	2.6(1.4)	2.7(1.3)	2.9(1.5)	1.5	0.5			
社会的距離	7.5(3.3)	8.0(4.6)	5.1(4.0)	6.0(3.3)	5.0(2.9)	3.0(2.4)	4.4*	15.5***	0.3	2.7***	2.4***

():標準偏差

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

①－②:講義前－講義後 ①－③:講義前－実習後

②－③:講義後－実習後

ること、患者からの暴力的言動を受ける体験が看護師個人に外傷的体験として刻み込まれている可能性も否定できない。」と述べている。実際に暴力を受けたと講義の感想に書いた経験学生がいたことから、その体験の質によっては、否定的なイメージにつながり、社会的生活場面において距離を置く要因となったのかもしれない。今後は調査対象者の体験の質を明らかにしていく必要がある。

4-2 講義と臨地実習が態度に及ぼす効果

4-2-1 講義が及ぼす効果

講義前と講義後では、社会的距離に変化がなかったものの、イメージに関しては「危険な－安全な」「こわい－こわくない」で講義前と講義後で差が認められた。講義によって、精神障がいをもつ人は安全で、怖くないというイメージへと変化した。これは安心感をもたらす認知的要素として考えられる。学生に安心感をもたらしたのは、講義のなかでマスメディアの精神障がい者の事件の伝え方、犯罪率においても実は一般人の割合が精神障がい者よりも高いことを伝えたことが有効だったかもしれない。講義を通して精神障がい者に関する正しい知識を伝えることによって、学生の安心感を高められることが示唆される。

4-2-2 実習が及ぼす効果

イメージについてはほとんどが講義後と実習後に差があった。臨地実習そのものが、精神障がい者に対するイメージをポジティブなものへ

と変化させた。また、社会的距離も実習後に小さくなることが示された。

学生にとって、臨地実習で体験した看護が精神障がい者に対する感情や認知、行動的成分により影響を与えたことがわかる。今回の調査で言えることは、実習ではひとりの患者を受け持ち、その人のことをよく考え理解するように指導者に動機づけられた。毎日自分が実践した援助を評価し、社会復帰のための援助を日々指導者とカンファレンスで話し合った。そして、受け持ち患者との面接過程をプロセスレコードで振り返り、その人の感情や思い、自分の感情や思いを明らかにしていった。三田⁷⁾がいう人間的接触体験ができた実習内容が感情や認知だけでなく、行動的側面をも変化させたと考えられる。しかしながら、「暗い－明るい」「迷惑－迷惑でない」は交互作用が認められ、未経験学生にのみ差が認められた。経験学生においてそのイメージが実習後も変化しなかった理由は、こういった経験をしてきたのか、どういう患者を受け持ったのか調査をしていないため明確ではなく、今後は実施する必要があると考える。今後、経験学生の受け持ち患者を選定する際には、今まで接したことのない患者を受け持つように配慮することはイメージの改善をもたらすかもしれない。

以上のように精神障がい者のイメージや距離感の改善には講義だけでは不十分で、臨地実習が非常に有効であることがわかった。今後は、講義で精神障がい者との体験の質が看護師に及

ばす影響についての話を加え、実習指導においては経験学生に対してより配慮した実習指導を進めていく必要があると考えている。

4-3 今後の課題

本調査の結果は、精神科経験の内容、経験してきた実習内容、精神科実習病棟の特徴、学生の受け持ち患者の状況も関連すると考えられるが、それを検討していない。対象人数も少なく一般論として述べるのにも限界が生じた。今後は学生の体験現象も質的に検討していく必要がある。

5. 結論

精神科経験のある方がない学生よりも精神障がいを持つ人に対して不活発な治らないイメージを持ち、距離を遠くに感じた。講義で正しい知識をもつことで怖くない、安全なイメージに変化し、実習後にはより社会的距離も近くなり、好意的な態度変容が認められた。以上のことから、臨地実習が精神障がい者へのイメージや距離感に良い影響を与えていたことがわかった。

6. 引用文献

- 1) 星越活彦；精神障害者に対する看護学生の社会的態度，臨床精神医学，34(3)，357-363，(2005)
- 2) 田中国夫編著；新版 現代社会心理学，誠信書房，(1977)
- 3) 石毛奈緒子．林直樹；看護学生の「精神障害

者」に対するイメージ，日社精医誌，9；11-21，(2000)

- 4) 牧田潔；統合失調症に対する社会的距離尺度(SDSJ)の作成と信頼性の検討，日社精医誌，14，231-241，(2006)
- 5) 鋤田みすず．辻丸秀策．大西良他；患者家族と一般家族の統合失調症に対する社会的距離とイメージ-多面的調査からの比較-，久留米大学文学部紀要社会福祉学科編第5号，57-67 (2005)
- 6) 大島巖；調査結果からみた精神障害者施設の地域定着化の条件と課題，星和書店，284-293 (1992)
- 7) 三田優子．山崎喜比古；精神障害回復者と地域住民の共生にかかわる住民側の要因，星和書店，271-282 (1992)

参考文献

- 1) 津田くみ子；精神科実習における学生の対象に対する思いの変化，日本看護学会第36回看護教育論文集，119-121，(2005)
- 2) 林直樹．山科満．五十嵐禎人；入院治療における精神分裂病患者と治療者のイメージ評価の臨床的意義について，臨床精神病理，21，245 - 258，(2000)
- 3) 原田純治編著；社会心理学-対人行動の理解-，ブレーン出版，(2006)

(受理 平成22年3月6日)